

## グルジア紛争が国際社会に及ぼす影響

米国担当 東京財団客員研究員 渡部恒雄

グルジア紛争は大統領選に大きな影響

- ・ マケイン候補はロシアへの厳しい姿勢と素早い対処で安全保障と危機に強いリーダーというイメージで支持を伸ばした。
- ・ オバマ候補は休暇中で反応が遅れ、ロシアとグルジアの双方に対し中立的で抑制なメッセージを出したことで、弱いリーダーとの印象を与えてしまった。
- ・ 危機感を持ったオバマ陣営は、グルジア紛争直後、グルジアに飛びサーカシビリ大統領と会ってロシアに断固としたメッセージを発信したバイデン上院外交委員長を副大統領候補に指名。

ロシアに対する外交姿勢でマケイン陣営の外交・安保政策の方向性が見えてきた

- ・ マケイン陣営には、現実派のアーミテージ元国務副長官とネオコンのロバート・ケーガン、カーネギー平和財団上級研究員の双方が混在していたため、これまでマケイン陣営の外交・安全保障政策の方向性がクリアではなかった。
- ・ マケインと外交・安全保障アドバイザーのランディー・シェーネマンのグルジアとの近い関係とロシアへの厳しい姿勢は、チェイニー副大統領らのタカ派・ネオコン路線に近い姿勢が伺われる。
- ・ むしろ、オバマ陣営とブッシュ政権のライス国務長官・ベイツ国防長官の姿勢のほうが、マケイン路線よりも近い。
- ・ ロシアのグルジアへの侵攻を批判し、グルジア領内からの撤退を求めるという姿勢は両陣営とも一緒。ロシアの民主後退や周辺諸国への圧力に対して G8 のメンバーシップから外すという強硬姿勢をとっているところが、マケイン陣営の特徴。
- ・ これに対して、オバマ陣営の外交政策アドバイザーのスーザン・ライス元国務次官補は、そのようなメッセージはむしろ事態を複雑にすると指摘。オバマ陣営のペリー元国防長官とオルブライト元国務長官は、ロシアを G8 から外して外交交渉の場を自ら閉じてしまうような態度は、外交的に未熟と指摘。

ロシアはなぜグルジアの軍事行動に過剰防衛をしたのか？

- ・ ロシアにとっては、これまでも米国や欧州が NATO 拡大やミサイル防衛システムを東欧に配備しようとしていることに危機感と不満があった。NATO「庇を貸して母屋を取られてはたまらない」というような感覚に近いと思われる。
- ・ したがって、自らの「庇」であるグルジアとウクライナの NATO 加盟は、安全保障上

も国家のプライドとしても譲れない一線だった。

- 米国は、ライスやゲイツなどの現実主義者も含め、90年代後半のポーランド、ハンガリー、チェコなどの最初のNATO拡大の頃とは、ロシアの経済力もプライドも大きく変わってきていることに気がついていなかった。またイラク戦争後、自からの軍事力が制約され、軍事力も、指導力も相対的に低下していることへの自覚がなかった。
- 1990年代に論争となった最初のNATO拡大のときのほうが、米国内でロシアを刺激すべきではないという慎重論が多かった。その時代は、まだ「強いソ連」の記憶が米国人の中にあった。しかし、その後、ルーマニアやバルト三国など、NATOの拡大に対してロシアの比較的少ない抵抗の中で、ロシア人の危機感と自国のパワーの客観的に評価する態度が米国の中で失われてきた。

#### 今後の米国の外交・安保政策の流れ

- 対北朝鮮、イラク、イランへのネオコン・タカ派主導の第一次ブッシュ政権の姿勢は、米国の圧倒的な軍事力を過信し、外交交渉の道を閉ざし、結果的に自国の利益を達成できなかった。
- 今回のマケインの対ロシア政策で予測されることは、マケイン陣営は「民主主義連盟」(League of the Democracy)を提案するなど、民主主義イデオロギーベースのネオコン的要素のある力の要素を強く打ち出す外交姿勢を求めていくと考えられる。
- 日本にとっては、米国との同盟関係を維持する上では、米国のこのような姿勢と方向性は、同盟維持の観点からすれば、必ずしもマイナスばかりではない。実際、マケイン候補は、麻生外相(当時)の「自由と繁栄の孤」を価値を重視する外交として評価している。
- しかし、米国の現実の力を考えると、そのような外交姿勢が単純に達成できるとは限らないし、同盟国の安全保障の負担への要求も大きくなっていくという点も考慮にいれなくてはならない。
- ロシアと米国との対立が、「新冷戦」になっていくかどうかは、かつての米国対ソ連のような自由主義対共産主義というイデオロギー対立となるかどうかで判断される。現実の世界を見渡せば、世界を民主国と非民主国を二つに分けて対立することは、非現実であり、どこの国益にもならない。
- イラク戦争におけるネオコン・タカ派の失敗は明らかだったと思われるが、ブッシュ大統領は人気を落としたが、ネオコン・タカ派外交の底流は決して消えていないし、形や居場所をかえてつねに蘇ってくる。
- マケイン陣営は、保守派の女性候補者サラ・ペイリン氏の指名で、社会的保守派の支持を強め、支持率でオバマ候補を逆転した。このような国内の保守派とネオコン・タカ派の相性はきわめていいし、どの国もそうだが、対外政策は国内の政治要素によって決められることが多い。
- オバマ陣営は、この要素をどのようにマケイン候補を批判し、米国民の支持を得ることができるのか、9月・10月の大統領選挙の論戦は、重要な意味を持つことになるだろう。